

『パルムの僧院』における《アウトロー》フェランテ・パラ

The outlaw Ferrante Palla in *The Charterhouse of Parme*

井出 勉

IDE Tsutomu

フェランテ・パラ(以後、基本的にフェランテとのみ表記)、この人物にいち早く着目したのは、『パルムの僧院』(以後、『僧院』)を読み『パール氏論』^{注1)}(1840年)で賞賛したバルザックである。自身の創造したミシェル・クレチアンと比較して、その人物造形の素晴らしさを素直に讃えている。しかしながら、それ以降、フェランテは研究者の関心を引いているとは言えない。確かに、『僧院』第2部第21章にのみ目を向ければ、バルザックの賞讃を待つまでもなく、章全体を支配する人物として異彩を放つ。ところが、第21章以外では、他の登場人物の口を通して語られるのみということもあって、『副次的人物』どころか、単なる《端役》としての扱いを不当に受けてはいないだろうか。人文書院版『スタンダール全集』の解説で、バルザックの『パール氏論』に言及した生島遼一は、フェランテを「全体の釣合からは端役ともみえる自由主義者フェランテ・パラ」^{注2)}と表現している。それはまた、フェランテが、単なる端役では収まりきらない副次的人物級であるということを認めていることでもある。しかしながら、『僧院』第1部最終章で描かれたファブリスと歌姫ファウスタとの冒険の《逸話》のように、本筋とは離れた、近年しばしばTVや映画などで用いられる、主人公以外の人物を主とするスピノフもののような存在と見なされ、描かれている部分が少ないこともあって、研究者の関心を引いてこなかったことも十分納得できる。我が国においても、1961年の西川長夫、西川祐子の雑誌論文『ロマン主義時代における民衆とスタンダールの民衆 ―フェランテ・パラ論』^{注3)}以外、筆者自身のものを除けば看過されてきた人物である^{注4)}。しかしながらフェランテは、自ら護民官を名乗り、当代随一の詩人という評価を得ながらも、他方では狂人とも言われ、生活のためには追いはぎ行為をする男でもある。フェランテの狂気にも、スタンダール的情熱の発露と見なすこともできるし、追い剥ぎ行為にしてもロビン・フッド的な義賊的行為の一面もある。さらには、フェランテが大公毒殺の使命を帯びることができるよう、医術行為を施す医者としての側面も併せ持つ。この愛すべき人物フェランテをファブリスの原型、『僧院』第21章を作品全体の縮図とみなすと^{注5)}、ファブリスの影のようについて、その圧倒的な存在感は、モスカやサンセヴェリーナ公爵夫人に匹敵するものではないかと思われる。ファブリス、モスカ、サンセヴェリーナ公爵夫人ら、『パルムの僧院』の主要な人物たちは、何らかの規範を侵犯する《アウトロー》的人物であると言える。パルムという君主国が主となる舞台であるだけに当然と言えば当然だが、その中でも異彩を放つフェランテ・パラに、今回の小論ではその《アウトロー》的側面に焦点を当てて論じてみたい。

I フェランテ・パラ:副次的人物か端役か?

前述したように、いち早く『僧院』(1839年)を読み、『パール氏論』(1840年)で、フェランテの人物像の重要性を最初に指摘し、激賞したのはスタンダールの同時代のバルザックである。『パール氏論』の中で、多くのページ数を割き、満を持して「ここで、巨大な副次的人物の一人、この作品中、しばしば問題になっている人物について語らねばならない。死刑宣告をうけた自由主義者の医師でイタリア中を放浪して主義の宣伝者としての任務を遂行しているフェランテ・パラについて語らねばならない時がようやくきたのだ」^{注6)}と、フェランテに対する異常とも言える執着をみせている。さらに、大公、ジーナ(後のサンセヴェリーナ公爵夫人)、モスカを始めとする他の登場人物がいかにすぐれていても「絵画の片隅におかれたフェランテ・パラのすばらしい像は、あなたの視線をとらえ、賞讃を強いるものである」^{注7)}とまで言い切る。バルザックの目には、『人間喜劇』の中で自らの創造した共和主義者のミシェル・クレチアン^{注8)}を遙かに凌駕する人物像として、フェランテを「副次的人物の一人」^{注9)}(un des personnages secondaires)と見なしている。もちろん、『僧院』を賞讃しながらも、「軽快さ」^{注10)}(légèreté)が欠けているとして、ファブリス中心の物語ではなく、ドラマはパルムに限定し「主要人物」^{注11)}(les principaux personnages)を「大公とその子息、モスカ、ラッシ、公爵夫人、パラ・フェランテ、ロドヴィコ、クレリア、クレリアの父、ラヴェルシ夫人、ジレッチ、マリエッタ」^{注12)}とするよう勧めている。つまり、パルムの宮廷を舞台とした作品に書き直すよう忠告しているのだ。このバルザックの忠告の根幹には、フェランテの存在が大きな役割を担っていることはまちがいない。フェランテを単なる端役ではなく、作品の重要な役割を担う副次的人物に格上げし、ファブリスを端役もしくは削除することで作品に「軽快さ」がもたらされるというのである^{注13)}。ファブリスの排除の是非について今回論じることではないが、フェランテの存在がバルザックに、いかに大きく映ったかの一つの証左ではあるだろう。

残念ながらと言うべきか、バルザックの激賞にもかかわらず、フェランテはスタンダール研究者の関心を引いてきたとは言えない。それは、狂気(folie)、森(forêts)や山賊/追い剥ぎ(brigants)といった点で、フェランテが言及されることがあってもフェランテを中心とした論考は多くはない^{注14)}。かつて、物にとらわれない天衣無縫な人物であるファブリスと、革命家で詩人のフェランテとの類似点について学会での発表を試みたが^{注15)}、その際のドキュメンタ

ションにおいても、先行研究はごくわずかであった。恋と自由主義が同価値を持った狂気の詩人として、1957年にアーヴィング・ホーはフェランテをロビン・フッドに結びつける^{注16)}。1961年には、西川長夫・西川祐子が、ロマン主義的な民衆との関わりを考え、民衆の理想を体現したロビン・フッド的人物としてフェランテをとらえ、スタンダールの理想美論の観点からフェランテとファブリスとの類似を指摘されている^{注17)}。さらに、1974年にはエミール・J・タルボが、変装・貧困・隠遁生活などの類似点を指摘した上で、詩的魂の持ち主故に、両者とも政治に向かず、社会から孤立していると考察した^{注18)}。これらの研究の後、フェランテに特に焦点をあてて『僧院』を読み解こうとする論考は見当たらないと言って良いだろう。今回改めて、共和主義者で生活のために、山賊/追い剥ぎ家業に身を落としながらも、ロビン・フッド的矜持を失わない《アウトロー》フェランテに迫ってみたい。その上で、積年の課題である、フェランテが副次的人物なのか単なる端役なのか、その狭間に位置する人物なのかという問題に迫られたいと思う。

Ⅱ フェランテ・パラのモデル再考：実在のモデルから伝説のモデル、架空の人物へ

フェランテは、共和主義者の革命家、詩人、山賊/追い剥ぎ、狂人といった様々な要素を持つ人物であるだけに、実在のモデル探しも多岐にわたっている。この点についてもこれまでに述べたことがあるが、新たにバブーフの名を加えて振り返ってみたい^{注19)}。

フェランテ・パラ(Ferrante Palla)の名前の由来については、何人かの注釈者たちの意見の一致するところである。それは、フェランテ・パラヴィッチーノ(Ferrante Pallavicino)の名前を短く縮めたものと考えられている。フェランテ・パラヴィッチーノという17世紀の詩人は、教皇やローマの宮廷に対する誹謗文の作者として広く知れ渡っていたようである。さらに、『僧院』のフェランテのように投獄経験もあり、いくらか狂気を帯びた人物としても知られ、1644年には逮捕され処刑されている。これらのことをスタンダールはよく知っていたようで、それ故に、フェランテ・パラヴィッチーノについて、スタンダールが単に名前だけを借りてきたと断じることはできない。『僧院』のフェランテに近い特徴も伺えるからである^{注20)}。しかしながら、パルマ生まれのジョヴァンニ・ラゾーリ(Giovanni Rasori)の前には、フェランテ・パラヴィッチーノの存在もかなり影が薄くなる感がある。スタンダール研究家によって、ラゾーリは最も『僧院』のフェランテに近い実在のモデルの一人と見なされている。とりわけフランソワ・ミシェルが、その著『スタンダール研究』でフェランテとラゾーリの類似性を強調している^{注21)}。ラゾーリは、フェランテ同様、医者^{注22)}、詩人、作家、共和主義者と

いった様々な顔を持っている。なおかつ、フェランテのように狂人と見なされている(チザルピンの政府によってラゾーリは、狂人として大学の職を追われている^{注23)})。

ラゾーリは進歩的な医者であり、やがて共和主義の喧伝者となり、『自由と平等の友の会』紙(*le Journal de la Société des Amis de la Liberté et de l'Égalité*)を発行した^{注24)}。1798年、ラゾーリが32才の時、匿名の諷刺文書を発表する。これが、彼に犯罪人の烙印を押す原因となる。その上、当時のパンフレットが彼のことを毒殺者(empoisonneur)と呼んでいるところなど、フェランテが、毒を用いて大公を亡き者にする下りを想起させる^{注25)}。ラゾーリは、死刑の脅威の下にさらされつつ、ミラノやマントーバの牢獄で3年以上過ごしている。しかし獄中でしたためた詩は、同時代の人々が、「ダンテのよう」(*dantesque*)と評した美しい詩であったようだ^{注26)}。フェランテの詩句もまた、モスカによって「ダンテと同じくらい美しい」と評される^{注27)}。さらに、スタンダール自身もラゾーリを「ヨブのように貧しい」(*pauvre comme Job*)とか「ラゾーリは鉄のごとき意志の持ち主である」(*Rasori a une volonté de fer*)と手紙で評している^{注28)}。このことは、フェランテ自ら、公爵夫人に「あなたにきられることのほかはなんにもも恐れない魂と、鉄のからだにここにありますが」^{注29)}という場面を想起させる。もちろん、スタンダールの手になるフェランテと実在のラゾーリでは違っている点も多い。しかし、それは作家スタンダールの想像力が脚色したと考えれば、無視できないモデルの一人だと言うことが十分納得できるのではないだろうか。

フェランテが「人民の護民官」(*tribun du peuple*)と自ら名乗っていることから、容易にグラッキュス・バブーフ(1760-1797)を連想することができるからなのか、それ以外に一致する要素がバブーフとフェランテにはほとんどないと考えられているからなのか、『僧院』の様々な注釈版でも、フェランテのモデルとしては見過ごされているようである。《バブーフの陰謀》あるいは《平等のための陰謀》として知られる1796年の反政府運動の企て自体は、バブーフらの逮捕によって一発の小さい打ち上げ花火のように収束する、フランス革命史の小さな陰謀事件である^{注30)}。しかし、現在残されているバブーフのやや憂いのこもった肖像画や素描(ハンサムと言えないこともないが)などや失敗に終わる企て、双方とも「人民の護民官」という呼称を用いていることなどから、フェランテ造形のモデルの一人として看過することはできないように思われる^{注31)}。バブーフのような人物は、日本人研究者の目にこそ魅力的というか興味ある研究対象として映るのであろうか。1973年に書かれた、平岡昇の『平等に憑かれた人々 ―バブーフとその仲間たち―』^{注32)}は、早い段階で、スタンダールのバブーフ受容に迫るものである。とりわけ第1章の「バブーフ伝説」は示唆に富むも

のである^{注33)}。《伝説》と《実像》のギャップをどこまで理解し、そしてどのようにそれを利用して、スタンダールは作品に取り入れているのか。バブーフもそうした人物の一人として取り込まれ、フェランテの人物像は創造されているのではないだろうか。この点は、後に述べる、マンドランやカルトゥーシュのような前時代の伝説となり神話化されたアウトローの人物についても同様ではないだろうか。バブーフに戻ろう。

前述の平岡昇は、時の政府によって「バブーフ一味」の暗い影像をひろく流布させるキャンペーン^{注34)}が行われた事を指摘する：

バブーフたちの私有制否定の「共同の幸福」の理想は、あらゆる人から身ぐるみ剥ぎとり、無一物にしてしまう強盗の哲学に仕立てられた。総裁政府が民衆のあいだに入念にばらまいた、いっさいの所有権を抹殺する凶悪なアウトローのイメージは、一種のパニックをみちびきだしたほど強い効果があった^{注35)}。

この結果、「暴徒の首領としてのバブーフ伝説」^{注36)}が民衆の心に広く根付いたとする^{注37)}。一方、こうして捏造され広まった陰惨なバブーフのイメージは、スタンダールやミシュレのようなバブーフ事件前後に生まれた「なんらかの意味で革命から作家的な精神のを酌み取った人たちの心に宿っていたバブーフ像」^{注38)}とは異なっていたとする。バブーフの盟友であったブオナロティの『バブーフの、いわゆる平等のための陰謀』をスタンダールが呼んでいた可能性を指摘した上で^{注39)}、平岡昇は「スタンダールは、彼の用語で言うエネルギー（精力）とナチュレル（自然性）に富み、幸福の追求に万難を排して情熱を集注する、全面的な生の燃焼の表現者のタイプのなかに、バブーフを数えいれていたように思われる」^{注40)}として、『ローマ散歩』の一節でミラボーやバルナーヴといった革命家と並んでバブーフの名を挙げている箇所をその拠り所とする^{注41)}。さらに、スタンダールの作中人物の中でも特に、『赤と黒』のジュリアンや『僧院』のファプリスに、スタンダールが受容したバブーフのイメージが強く投影されているとしている^{注42)}。確かに、『イタリア年代記』ものの人物やジュリアン、ファプリスらにスタンダール流のエネルギーの表現者である《バブーフの影》を見ることは吝かではない。スタンダールの作品を読み込んでいる平岡昇にしても、フェランテに言及してはいないので一概に否定できないが、二つのバブーフのイメージのうち、政府が流布したバブーフの「凶悪なアウトローのイメージ」も、フェランテの人物像の中では同居しているように思われる。大公毒殺の任を帯びるフェランテには、ロドヴィコと同じく、トリックスター的な《悪の道化》のイメージをぬぐい去ることはできないのではないだろうか^{注43)}。スタンダールは、

一般に流布されたいわゆる作られた《英雄伝説》と自らが消化し受容した《英雄伝説》の両方を人物造形に取り入れているように思われる^{注44)}。このことは、後述する、ロビン・フッド、マンドランやカルトゥーシュといった《アウトロー》のものでも同様ではないだろうか。次節ではスタンダールが見聞きし受容してきた《アウトロー》について考察したい。

Ⅲ 《アウトロー》の系譜：ロビン・フッド伝説から《アウトロー》たちの回想録へ

《アウトロー》という観点から眺めると、ロビン・フッド伝説、ウィリアム・テル伝説、山賊（追いはぎ）、義賊、などとサッカの森に暗躍するフェランテとの呼応は無視できない。とりわけ、19世紀におけるスコットの歴史小説人気の高まり、ロビン・フッドへの言及で始まる『アイヴァンホー』（1819年）の『僧院』やフェランテの人物造形への影響は大きいと思われる。前述の西川論文でも言及されているが、スコット以降、ロマン主義文学の高まりとともに、ロマン主義化されたロビン・フッド像が、多くの小説で義賊的要素を持つアウトローとして描かれている。19世紀後半のハワード・パイルの『ロビン・フッドの愉快な冒険』（1883年）の文字通りロマンチックで傷つきやすいアウトローであるロビン像。そこに至る諸作家の《恋するアウトロー》の先駆けとも言えるフェランテの姿は、バルザックの人物造形を越えて、嫉妬させるほどだったのではないだろうか。

南塚信吾は『アウトローの世界史』^{注45)}の中で、自らが扱う《アウトロー》を、「英語でいうアウトロー、しかも「義賊」というアウトローに限定」して定義づける：

アウトローは、法律上の保護を奪われた者という意味で、無法者や悪漢を表す言葉である。英語では、イタリア語起源の「バンデイト」にもあたり、日本語では、「無宿」というのがぴったりとあてはまる。そのなかにも、盗賊、匪賊、追い剥ぎ、放浪者などいろいろのものがあつた。本書では、アウトロー、バンディト、そして盗賊をほぼ同じような意味で使うことにする^{注46)}。

『19世紀ラールス大事典』には、フランス語の《hors-la-loi》はまだ掲載されておらず、英語の《outlaw》がそのまま使われている。そこでは、《アウトロー》とは、文字通り法律の外に置かれた人（homme mis hors la loi）で、いささかも土地（国）を持たず略奪や山賊行為で生活し、《pillard》、《brigand》、《pirate》などの語と同義義で使われていたようだ。歴史的には、ウィリアム征服王の遠征の際、ノルマン人の征服者たちによって法の保護外に置かれたサクソン人に与えられた名であり、獣のように追い詰め

られ、森に逃げ込みノルマン人に対する追い剥ぎ行為で生活を送っていた者に与えられた名であったとされる。その最たる者が、「アウトローの中で最も有名な盗賊の首領の一人」(un des chefs les plus célèbres des OUTLAWS)ロビン・フッドであったことが記されている。『スタンダール辞典』においても、【BRIGANDS】や【FORÊTS】の項目の中にわずかに言及され、19世紀においては、山賊/追い剥ぎは、もはや考古学的残滓であり、フェランテもまた「一つの弱められた(前時代の)エコー」(une écho affaibli)^{注47)}に過ぎないとされている。スタンダールにとって確かに森は、文明が飼ひ慣らそうとする生のエネルギーの代表的な例であり、山賊/追い剥ぎが隠れ住む場所であって、それゆえ『僧院』第21章で粗野な人/野蛮人(文字通り訳せば、森の男)、《アウトロー》フェランテ(le hors-la-loi Ferrante Palla, homme des bois)^{注48)}がサッカの森に登場するのである。

第21章の初めに、大公エルネスト4世が「山賊(les brigands)に拐かされますよ、美しい公爵夫人」^{注49)}という場面では、フェランテも含めて《brigand》と言う語が用いられるが、フェランテは「盗っ人/追い剥ぎ」《voleur》あるいは「追い剥ぎ家業の男」《voleur de grand chemin》という語でも形容される^{注50)}。

フェランテにとって、「盗む」《voler》という行為は、フェランテが《義賊》であることの証ともなる：

「私は犠牲者の表を作っています。将来何か手にはいったら、とっただけ返すつもりです。私のような護民官の仕事は危険ですから、月100フランの値打ちは十分あると思っています。だから年に1200フラン以上とらないことにしています。違いました。もう少し取ります。本の印刷代も払っていますから」^{注51)}

「本の印刷代」とはフェランテが「当代一の偉大な詩人の一人」^{注52)}であるが故、印刷代も最小限の必要経費として許容される。こうして、フェランテは単なる《無法者(アウトロー)》ではなく、《義賊》的要素をもった《アウトロー》の系譜にいられる。フェランテの《義賊》的行為については、「イタリアにおける追い剥ぎたち」(Les Brigands en Italie)の、ピエモンテ地方の「正直者の追い剥ぎ」(brigand honnête homme)、ロンディノの逸話を想起させる^{注53)}。さらに興味深いのは、スタンダールと親交のあったメリメが、同じ題材を基に、1830年2月13日付の「ナショナル」紙に匿名で『ロンディノの話』(Histoire de Rondino)として発表している点である^{注54)}。スタンダール自身も、キュビエの義理の娘であるソフィー・デュヴォーセル(Sophie Duvaucel)宛ての1830年3月7日付けの書簡でこのことに言及していて、メリメがロンディノの性

格の美しさを減じてしまい、いくらか彼の激情を取り除いたことを惜しんでいるように思われる記述がある^{注55)}。メリメのプレイヤード版の注釈者は、当時のメリメとスタンダールの手紙のやりとりなどから、スタンダール自身もこの逸話の作品化を考えていた節があり、メリメはスタンダールからそのインスピレーションを得ていたのではないかと言う。このことは、メリメ自身もこの作品を作品集に載せることをせず、死後1929年になってようやく刊行された経緯からしても十分考えられる^{注56)}。また、「イタリアにおける追い剥ぎたち」のスタンダールのプレイヤード版には、「『僧院』の追い剥ぎフェランテ・パラの予示」(Préfiguration du bandit de La Chartreuse de Parme, Ferrante Palla.)という注が付けられていることも記しておきたい^{注57)}。

ロンディノの話などから、フェランテが、《義賊》的要素をもった《アウトロー》として考えられていたとしても、それ以外の《アウトロー》の影響はどうだろうか。最も古く、最も容易に想像しうるのは、ロビン・フッド(あるいはロビン・フッド伝説)であろう^{注58)}。スタンダールにしても、どのような形にせよ、シャーウッドの森に潜むロビン・フッドの話を聞き及んでいるはずである。もちろん、ウォルター・スコットの熱心な読者であったスタンダールなら、スコットのロビン・フッドものの『ロブ・ロイ』(1817年)、『アイヴァンホー』(1819年)を第一に考えねばならない^{注59)}。とりわけ、『アイヴァンホー』の冒頭のロビン・フッドへの言及がある箇所は、『僧院』第21章のフェランテ登場の書き出しと雰囲気、描写の仕方とともによく似ているのではないだろうか：

イギリスも、ドンの河水がうるおす、あの楽しい地方には、大昔は、大森林が広がっていた。(…)また昔は、おとぎ話にでてくるウォントリの竜が出没していたのもここであるし、薔薇戦争のころには、この辺ではげしい戦争があった。それからイギリスの歌にうたわれて人気のある勇敢な無法者の仲間(ces bandes de braves hors-la-loi dont les anciennes chansons anglaises ont rendu les exploits si populaires)のあばれまわったもこの辺である^{注60)}。[ウォルター・スコット『アイヴァンホー』]

※この無法者とはもちろん、ロビン・フッドのこと

一年近く前、公爵夫人の不幸はもう始まっていたが、彼女は一人の変な男と知り合いになっていた。ある日、この国で月(luna)にとっつかれたといわれるとき、急に思いついて、夕方サッカの別荘に行ったことがあった。別荘はコロロノの先、ポー河を見降ろす岡の上にあった。彼女はこの領地を美化するのを楽しみにしていた。岡の頂上をとり巻き、別荘まで拡がっている大きな森を愛していた。森の中の景色のいいと

ころに、小道を作らせることに凝っていた^{注61)}。[『パルムの僧院』第21章]

スコットの『アイヴァンホー』では、ロビン・フッドは、その正体を明かすまではロクスリーと言う名で登場するのだが、《アウトロー》としての所行を許された後、あっさりとフェイドアウトしていく：

ロビン・フッドがその後どうなったかについては、かれの不慮の死の話と同じく1ペニー半の安値で一度売られたあの黒文字入りの花環の中にあるはず^{注62)}。

一方、フェランテも大公毒殺の使命を果たした後、逃亡しアメリカへ行く決意を示し、作品の中から消えていく：

6ヶ月の後に、私は顕微鏡を手に持ち、徒歩で、アメリカの小都会を歩きまわっているでしょう。私の胸に住むあなたの唯一の競争者を、なお愛すべきかどうか見てまいります^{注63)}。

もっとも、『アイヴァンホー』では主人公たるアイヴァンホー自体も、恋する《アウトロー》的な存在として、フェランテと重なるのだが、この点は次節で述べたい。

前述の西川長夫・西川祐子は、スタンダールが『アイヴァンホー』を読んだことは明らかとした上で、スコットを読んだスタンダールがロビン・フッド的人物を描こうとしたということは証明できないとしている。その上で、「スタンダールが生きていた文学的環境」^{注64)}こそが問題なのだという。ロマン主義という「文学的環境」の下、スタンダールが「中世イタリアの山賊の物語を読んだ時に、それをロビン・フッド的に捉えるのはきわめて自然であったとは云えよう」^{注65)}と述べている。さらに、「ロマン主義時代に続々と現れた盗賊達は、ロビン・フッドのかなり歪められた形であろう」として、シラーの『群盗』(1781年)、バイロンの『海賊』(1814年)などを挙げている^{注66)}。さらに、スイスのウィリアム・テル伝説も含めれば、ロマン主義文学の高まりとともに、ロマン主義化されたロビン・フッド像が、多くの小説で義賊的要素を持つ《アウトロー》として描かれている。19世紀後半のハワード・パイルの『ロビン・フッドのゆかいな冒険』(1883年)によって、ロマンチックで傷つきやすい《アウトロー》であるロビン・フッド像は完成され受け継がれていく^{注67)}。

ただ、「フランスにはロビン・フッド的伝説はないようである」^{注68)}と西川長夫・祐子が述べている点は、いくらか補足したい。直接的にロビン・フッド的と言われると確かに問題があるが、真実はともかく、民衆の間に広く流布された、一種の神話化され、伝説となった18世紀の盗賊カルトゥーシュ(1693-1721)とマンドラン(1725

(1724?-1755)を忘れるべきではない^{注69)}。マンドランには実際、《義賊》的要素は見受けられるが、カルトゥーシュなどは、実像はアンチ・ヒーローの典型である。しかし、ここで問題としたいのは、実像はともかく、未完の『ラミエル』(1839-1842)の草稿や創作ノートでも言及される、トロワ青本の『大マンドラン物語』と『カルトゥーシュ物語』で描き出された盗賊の姿である。スタンダールの『ラミエル』と民衆本については、すでに高木信宏の優れた先行研究があり^{注70)}、今回改めて詳述はしないが、カルトゥーシュに関しては、蔵持不三也の『英雄の表徴 大盗賊カルトゥーシュと民衆文化』^{注71)}には大いに示唆を受けた。また、千葉治男『義賊マンドラン伝説と近世フランス社会』では、ドーフィネ地方出身のマンドランの同郷人であるスタンダールとマンドランについて数ページが割かれている^{注72)}。千葉治男も指摘しているが、スタンダールは、『ラミエル』以外でも、『ある旅行者の手記』(1838年)でマンドランに言及している：

男はマンドランの話をした。この密輸者には大胆さも才智も欠けておらず、だからこそ、不道徳なのに民衆の心の中で生き続けている。それというのも、民衆は奉仕されるのに劣らず、楽しませてもらうことを少なくとも望むからである。征服者たちの人気を見ればわかる。マンドランは同時代のどの將軍より100倍の軍事的才能を備えていて、ヴァランスの絞首台で気高く死んでいった^{注73)}。【ヴァランス,1837年6月11日】

上記の記述も、『僧院』(1839年)や『ラミエル』構想執筆時に、スタンダールの中に伝説となり神話化されたマンドランのような盗賊のことが常に頭の片隅にあったことは間違いないであろう。スタンダールは犯罪者であろうが、そのエネルギーと才知を高く評価していて、それが作品の登場人物に反映されているのは誰もが認めるところである。ナポレオンに対する英雄崇拜にしても、青本を通して受け継がれた英雄化され義賊化されたカルトゥーシュやマンドランの姿は、ロビン・フッド伝説の受容とともに、フェランテの人物造形に一役買っていると言って良いだろう。

伝説化された《アウトロー》以外にも、スタンダールは、回想録を書いた《アウトロー》にも大いに関心を寄せている。特に、詩人としての顔も持つ、ピエール＝フランソワ・ラスネール(1803-1836年)とその『回想録』(1836年)は、『ラミエル』の恋人となる盗賊ヴァルベールの人物造形に用いられている^{注74)}。ラスネールの『回想録』出版以前から、スタンダールは、『法廷新聞』などを通して諸般の事情に精通していたようである^{注75)}。さらに、同時代のもう一人の神話的人物、フランソワ・ヴィドック(1775-1857年)もまたラスネールと並んでその『回想録』(1828年)は多くの文学者に影響を与え

ている^{注76)}。《詩人―人殺し》のラスネール、《追い剥ぎ―探偵》のザイドックは、カルトゥーシュやマンドランと並んで、いやそれ以上にフェランテの人物造形に影響を与えていると言える。

もちろん、『僧院』に名前が挙げられる、シルヴィオ・ペリコの『我が牢獄』(1832年)やアレクサンドル・アンドリアヌの『ある国事犯のシュピールバルク監獄回想録』(1837-1838年)も重要である^{注77)}。また、脱獄という点からもベンヴェヌート・チェリーニの『チェリーニ わが生涯』^{注78)}(1728年)も無視できないし、カザノヴァの『回想録』(1960年になって公表)ももっと早く日の目を見ていたらスタンダールの興味を十分に引いたであろうと思われる。フェランテが、三度も脱獄したことがある男^{注79)}として描かれている以上、チェリーニ、ペリコ、アンドリアヌの『回想録』は、ファブリスの投獄や脱獄と同じように重要な意味を持つと考えられる。

IV 恋する《アウトロー》の系譜：ロマンチックな《アウトロー》像とフェランテ・パラ

フェランテは、第21章で初めて登場するまでは、その登場を予告するかのよう、第6章で、モスカの口を通して語られる：

それはフェランテ・パラという男にナポレオン金貨を25枚貸してやったことです。これはこの国の狂人^{きちがい}みたいな男だがちょっと天才^{きちがい}みたいなところもある。われわれはこの男に、さいわい欠席裁判で、死刑の宣告をしました。このフェランテは生涯に200行ばかりの詩を作りましたが、これが無類のもので、まったく読んでさしあげていいんだが、ダンテに劣らぬ美しいものですよ^{注80)}。

その後も、フェランテについては風聞のみであり^{注81)}、読者は実際に登場するまでかなり長く待たされる。21章でサンセヴェリーナ公爵夫人に恋する《アウトロー》としてのフェランテの登場までさんざんじらされる形となる。この手法はハリウッド映画などで怪物などが登場するときに、全体像がなかなか現れず、見ているものの焦燥感をあおり、劇的な効果を狙う手法でおなじみである。だが、ルソーはすでに『告白』でこの手法を用いていると小倉孝誠は指摘する。小倉は、ヴァランス夫人とルソーとの初めての出会いが、二度にわたって先延ばしにされる場面を例に挙げて説明している：

ヴァランス夫人との出会いを読者に印象づけるために、作家はもうひとつ巧妙な戦略を用いている。まるで夫人の姿の描写を出し惜しりするかのよう、そしてそれによって描写の

快楽をいっそう高めようとするかのように、出会いの情景が二度にわたって先送りされるのである^{注82)}。

さらに、「この語りの遅延は、出会いの場面の劇的性格をいやがうえにも強調する」^{注83)}という。ルソーの『告白』の熱心な読者であったスタンダールは、無意識にせよルソーから学び取っていたのであろうか。いずれにせよ、スタンダールも、フェランテと公爵夫人が初めて出会う場面を21章まで遅延させたことで、「出会いの場面の劇的性格」が強調され、フェランテが『僧院』全体にわたって登場しているかのような存在感を持たせることに成功しているのではないだろうか。

恋する《アウトロー》フェランテが、初めてサンセヴェリーナ公爵夫人の前に現れるとき、「非常に汚い身なりの男」^{注84)}(un homme fort mal vêtu)として描かれる。その後も、「カプチン会修道士」^{注85)}(capucin)に変装して二度現れもする。前述したスコットの『アイヴァンホー』で、《アウトロー》のロクスリー(ロビン・フッド)を取り上げたが、もう一人主人公のアイヴァンホーもまた、ロウイーナ姫を愛したが故に勘当され領地を失い、リチャード獅子心王にともなって十字軍に赴いた、恋する《アウトロー》と言っていい存在である。このアイヴァンホーも、十字軍遠征から戻ってきて、初めてロウイーナ姫の前に現れるときは、素性も隠し、ぼろをまとった巡礼の姿(costume de pèlerin)をしている^{注86)}。主人公であるにもかかわらず、フェランテのように、素性は読者にも明かされず、ようやく巡礼の姿で登場するのは第4章である。その後、馬上騎士試合の際も、最初は甲冑を身にまとい^{かぶと}顔を隠し正体を明かさない^{注87)}。つまり、『アイヴァンホー』のロビン・フッド/ロクスリーは、ロビン・フッド的《アウトロー》として、アイヴァンホー自身は、恋する《アウトロー》として、『僧院』の変装したフェランテと重なるのではないだろうか。

恋する《アウトロー》もしくは、ロマン主義的《アウトロー》と言い換えることもできるが、当然、17世紀前半の陰謀事件を中心とするヴィニーの『サン＝マール』(1826年)を無視できない。パリに向かうサン＝マールが一旦戻って、愛するマリーに深夜別れを告げる場面は、恋する《アウトロー》の典型であり、この作品の成功がロマン主義的《アウトロー》の流れを形作ったといっても過言ではないだろう^{注88)}。もちろん、スコット以降、ロマン主義文学の高まりとともに、ロマン主義化されたロビン・フッド像が、多くの小説で義賊的要素を持つ《アウトロー》として描かれていく。パイルの『ロビン・フッドのゆかいな冒険』(1883年)以前にも、アレクサンドル・デュマ『盗賊の王子』(1863年)、『追放者ロビン』(1863年)がある。恋する《アウトロー》として、メリメの『カルメン』(1845年)のホセも忘れられない。

最後に、『僧院』の創作時期を考えると、サンドの『モープラ』

(1837年)を外すことはできない。恋することによって人間的に成長する山賊ベルナール・モーブラとサンセヴェリーナ公爵夫人に恋するフェランテの姿は重なり合い、ファブリスとクレリアの恋愛の原型となっているように思われる。スタンダールがどれだけ流行作家となっていたサンドを意識していたかと言うことは、『リュシアン・ルーヴェン』のマルジナリアを読むとひしひしと伝わってくる。もちろん、スタンダールらしい自己韜晦に隠れてはいる。スタンダール自身、時代の流行に敏感であり、そのことを作品に取り入れている以上、サンド作品との関連性にはもっと光を当てるべきだと思われる。

結び:『僧院』から『ラミエル』へ

ファブリス、モスカ、ジーナ、サンセヴェリーナ公爵夫人ら、『パルムの僧院』の主要な人物たちは、何らかの規範を逸脱する。それゆえ、『僧院』の人物は、副次的な人物や端役も含めて多くが《アウトロー》の資格を持つ。パルムという君主国が主となる舞台であるだけに当然と言えば当然だが、その中でも異彩を放つフェランテ・パラに今回は焦点を当てた。

スタンダールと民衆本との関わり、ピカレスクロマン、処刑された大盗賊カルトゥーシュ、マンドラン(義賊的要素も垣間見られる)、回想録を書いた犯罪者のラスネール、ヴィドックらの人物像がフェランテの人物造形に深く影響を与えていることは否定しがたいと思われる。《詩人》で《追い剥ぎ》のフェランテの姿は、スタンダールが最後まで書き続ける未完の小説『ラミエル』のヴァルベールの人物造形に反映されている。また、『ラミエル』と民衆本について論じた高木信宏が、「作品『ラミエル』こそ、『新マンドラン物語』にほかなるまい」^{注89)}と指摘していることも銘記しておく。ラミエルを殺そうとしたヴァルベールが、その美しさに魅せられて殺しをためらうところなど、前述のサンドの『モーブラ』を想起させる。そして、サンド渾身の大作である『コンシュエロ』(1843年)をじっくり読む時間がスタンダールに残されていたら、『ラミエル』と言う作品がどのような完成形となったのか興味が尽きない。

スタンダールの描く《アウトロー》的人物、何かに反抗する人物の多くは主役級の人物である。少なくとも、単なる端役ではなく、副次的な人物であることが多い。フェランテのように、『僧院』の第21章だけと言って良い登場の仕方をする人物に、端役以上の存在感を認めることを批判されることを承知の上で、フェランテの存在を通して『僧院』を読み直していただきたい。その上で、第21章が『僧院』全体の一つの核というか凝縮された原型ではないかという考え方も作品解釈の一つの可能性としてありうるということを理解していただければと思う。

注

※引用文は、基本的に邦訳のあるものはそれぞれの邦訳に従ったが、文脈によっては改訳を施したものもある。

※表記の統一上、引用文も含めて、漢数字は慣用的なもの以外アラビア数字に変更した。

注1) Balzac, *Études sur M. Beyle*, in *Œuvres romanesques complètes*, t., III, Pléiade, Gallimard, 2014, pp.619-658

注2) 「注目すべきは、全体の釣合からは端役ともみえる自由主義者フェランテ・パラのことを熱心にとりあげ、自分が『人間喜劇』中にえがいた共和主義者ミシェル・クレチアン(『幻滅』に登場する人物)と比較しつつ、この得意な人物の登場意義を論じていることだ」(生島遼一「『パルムの僧院』について」『スタンダール全集 第2巻』人文書院、1977年、p.X)

注3) 西川長夫、西川祐子「ロマン主義時代における民衆とスタンダールの民衆 —フェランテ・パラ論」『FRANCIA』第5号、1961年5月、pp.26-55

注4) 井出 勉「『パルムの僧院』における「詩人」の役割 — Fabrice, Ferrante Palla, Ludvic について —」南山大学修士論文、1987年

他には、横山昭正が『視線のロマネスク —スタンダール・メリメ・フロベール』(溪水社、2009年)の第1章「スタンダールと視線のロマネスク —『パルムの僧院』と『赤と黒』をめぐる—」において、「山賊詩人フェランテ・パラ」に数ページを割いているのが目立つ程度である(同上、pp.80-82)。

注5) 井出 勉「フェランテ・パラとファブリス —『パルムの僧院』創作に関するひとつの仮説—」日本フランス語フランス文学会編「フランス語フランス文学研究 第51号」、1987年、pp.129-130

注6) Balzac, *op.cit.*, p.642

注7) Balzac, *op.cit.*, p.643

注8) Balzac, *op.cit.*, p.643

ミシェル・クレチアンは、『幻滅』、『カディニャン公妃の秘密』などに登場する共和主義者。サンセヴェリーナ公爵夫人を愛するフェランテのように、ミシェル・クレチアンもモーブリニューズ公爵夫人に恋心を抱く。

注9) Balzac, *op.cit.*, p.642

注10) Balzac, *op.cit.*, p.653

注11) Balzac, *op.cit.*, p.654

注12) Balzac, *op.cit.*, pp.653-654

- 注13) Balzac, *op.cit.*, pp.653-654
- 注14) Voir *Dictionnaire de Stendhal*, Honoré Champion, 2003
- 注15) 井出 勉「フェランテ・バラとファブリス —『パルムの僧院』創作に関するひとつの仮説—」日本フランス語フランス文学会春季大会発表, 1987年6月
- 注16) Irving Howe, *Stendhal: The Politics of Survival*, in *Politics and the Novel*, Books for Libraries Press Freeport, 1957, pp.25-50
- 注17) 西川長夫・西川祐子, 前掲論文
- 注18) Emile J. Talbot, *Stendhal, the Artist and Society, Studies in Romanticism*, vol. XIII, n° 3, été 1974, pp.213-223
- 注19) 井出 勉「『パルムの僧院』における「詩人」の役割 —Fabrice, Ferrante Palla, Ludvic について—」南山大学修士論文, 1987年, pp.48-50
- 注20) Voir Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, éd. Antoine Adam, Classiques Garnier, 1973, p.670n. ; *La Chartreuse de Parme*, in *Romans et nouvelles*, t. II, Pléiade, Gallimard, 1989, pp.1406-1407n. ; *La Chartreuse de Parme*, in *Œuvres romanesques complètes*, t. III, Pléiade, Gallimard, 2014, p.1289n.
- 注21) François Michel, *Études stendhaliennes*, Deuxième édition augmentée présentée par Victor Del Litto, Mercure de France, pp.456-463
- 注22) 医者としての側面だけを取れば、スタンダールも診察を受けたコレフ医師、医師であった祖父アンリ・ガニョンも当然視野に入れる必要があるだろう。
コレフに関しては以下の書を参照：前川道介『愉しいピーターマイヤー 19世紀ドイツ文化研究』国書刊行会, 1993年, pp.340-348
ファブリスが牢獄に入ったことを知り絶望するサンセヴェリーナ公爵夫人にモスカは、「イタリアの名医、有名なラゾーリ」(*La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.401)を呼ぶことを提案する。また、ラゾーリとスタンダールは実際にミラノで会ったことがある：*Ibid.*, p.1312n.
- 注23) François Michel, *op.cit.*, p.457
フェランテの《狂気》については、第21章の書き出しの暗黒小説的雰囲気、月と狂気の関係から、ラドクリフ夫人の一連の怪奇小説、アリオストの『狂えるオルランド』(1516年)、人狼もので、『田園伝説集』(1858年)所収のサンドの「リュバンとリュパン」などとの関連を考えると興味深い。
- 注24) François Michel, *op.cit.*, p.457
- 注25) François Michel, *op.cit.*, p.458
- 注26) François Michel, *op.cit.*, p.458
- 注27) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.239
- 注28) 1818年4月14日付けアドルフ・ド・マレスト宛て書簡：Stendhal, *Correspondance générale*, t.III, Honoré Champion, 1999, p.106
フェランテもやせて貧しく、ヨブに比べられたラゾーリのごとく、聖ヨハネに比される：*La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.471
- 注29) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, p.476
- 注30) Voir Maurice Dommanget, *Babeuf et la conjuration des Egaux*, Spartacus, 1989 ; Claude Mazauric, *Babeuf*, Messidor/Éditions sociales, 1988 ; Victor Advielle, *Histoire de Gracchus Babeuf et du babouvisme*, t.1 et 2, Editions du CTHS, 1990 ; *Présence de Babeuf Lumières, Révolution, Communisme* Sous la direction d'Alain Maillard, Claude Mazauric, Eric Walter, Publication de la Sorbonne, 1994 ; Thierry Guilabert, *Gracchus Babeuf (1760-1797) Biographie non-autorisée L'égalité ou la mort*, Les Éditions libertaires, 2011 ; Philippe Buonarroti, *Conspiration pour l'égalité dite de Babeuf*, La fabrique édition, 2015
また、邦語文献に関しては以下のものを参照した：豊田堯『バブーフとその時代 —フランス革命の研究—』創文社, 1958年 ; 柴田三千雄『バブーフの陰謀』岩波書店, 1968年 ; 平岡昇『平等に憑かれた人々 —バブーフとその仲間達—』岩波新書, 1973年
- 注31) バブーフの肖像や素描などについては特に以下のものを参照した：Voir Jean-Marc Schiappa, *Gracchus Babeuf avec les Egaux*, Les Éditions Ouvrières, 1991 ; *Babeuf réveille-toi ! 1796-1996*, in *La Revue Commune* n° 2, 1996 ; François Larue-Langlois, *Gracchus babeuf tribun du peuple*, Édition du Félin, 2003
- 注32) 平岡昇, 前掲書
- 注33) 同上, pp.5-18
- 注34) 同上, p.9
- 注35) 同上, p.10
- 注36) 同上, p.10
- 注37) 同上, p.10

- 注38) 同上, p.13
- 注39) 同上, p.13
- 注40) 同上, p.13
- 注41) 確かに、スタンダールは、わずかに『ローマ散歩』(1829年)や『ナポレオンに関する覚え書き』(1836-1837年執筆)でバブーフに言及している: Stendahl, *Promenades dans Rome* in *Voyages en Italie*, Pléiade, Gallimard, 1973, p.663; Stendahl, *Mémoires sur Napoléon*, in *Œuvres complètes*, Cercle du Bibliophile, t.40, 1970, p.250
- 注42) 平岡昇, 前掲書, pp.13-14
『僧院』では、大公エルネスト4世は、絞罪に処した二人の自由主義者に夜な夜な怯え、寝台の下までのぞく場面 (*La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.228)があるが、平岡昇は、この自由主義者をバブーフの亡霊とみなしている(平岡昇, 前掲書, p.15)。これは、大公のモデルとされる、フランソワ4世が、二人のカルボナリ党員を1831年に処刑したことを源泉にしているだけに、自由主義者=バブーフ一味と考えるのはやや短絡的ではないかと思われる。
- 注43) フェランテに、コンメディア・デッラルテの道化アルレッキーノの女性の肉体をむさぼる動物的なイメージがあることが指摘されている (*La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.1320n)。『僧院』における道化のイメージについては、以下の拙論を参照されたい: 井出 勉「スタンダールにおける道化と逆転 ～『パルムの僧院』を中心として～」南山大学大学院文学研究科仏文学専攻紀要「葦」第10号, 1987年, pp.51-61.; 「『パルムの僧院』における道化の役割 ～ラッシーを中心にして～」南山大学大学院文学研究科仏文学専攻紀要「葦」第11号, 1988年, pp.1-26.; 「『パルムの僧院』における《魔の道化性》」南山大学大学院文学研究科仏文学専攻紀要「葦」第12号, 1989年, pp.1-16.
- 注44) 創られた英雄神話については以下のものを参照: オットー・ランク『英雄誕生の神話』野田倬訳, 人文書院, 1986年; アラン・コルバン『英雄はいかに作られてきたか フランスの歴史から見る』小倉孝誠監訳, 藤原書店, 2014年
- 注45) 南塚信吾『アウトローの世界史』NHKブックス, 1999年
- 注46) 同上, p.5
- 注47) *Dictionnaire de Stendhal*, *op.cit.*, p.120
- 注48) *Ibid.*, p.281
- 注49) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.470
- 注50) *Ibid.*, p.461
- 注51) *Ibid.*, p.472
- 注52) *Ibid.*, p.472
- 注53) *Les Brigands en Italie*, in *Voyages en Italie*, Pléiade, Gallimard, 1973, pp.1245-1246
- 注54) Mérimée, *Histoire de Rondino*, in *Théâtre de Clara Gazul Romans et nouvelles*, Pléiade. Gallimard, pp.1117-1121
- 注55) Stendhal, *Correspondance générale*, t.III, Honoré Champion, 1999, p.753-754
- 注56) *Histoire de Rondino*, *op.cit.*, pp.1667n-1668n
- 注57) *Les Brigands en Italie*, *op.cit.*, p.1754n
- 注58) 《アウトロー》《義賊》《ロビン・フッド》に関しては、特に以下のものを参照した: J.C.ホウルト『ロビン・フッド 中世のアウトロー』有光秀行訳, 1994年; 上野美子『ロビン・フッド物語』岩波新書, 1998年; エリック・ホブズボーム『匪賊の社会史』ちくま学芸文庫, 2011年; 南塚信吾『義賊伝説』岩波新書, 1996年; 南塚信吾『アウトローの世界史』, 前掲書; 宮下啓三『ウィリアム・テル伝説 ある英雄の虚実』NHKブックス, 1979年
また、《森》に関しては以下のものを特に参照した: ロバート・P・ハリソン『森の記憶』金利光訳, 工作舎, 1996年; 川崎寿彦『森のイングランド』平凡社ライブラリー, 1984年; 伊藤進『森と悪魔 中世・ルネサンスの闇の系譜学』岩波書店, 2002年
- 注59) 『ロブ・ロイ』は、「スコットランドのロビン・フッド」と呼ばれた、18世紀に実在した高地地方の義賊、ロブ・ロイことロバート・マクレガーを主人公とする小説である。また、『アイヴァンホー』にも、主人公ではないが、脇役の一人としてロクスリーという名で登場する。彼もまた、義賊的要素を持った《アウトロー》として描かれている(参照: 上野美子『ロビン・フッド物語』, 1998年, 145-150頁)。
アーヴィング・ホーも、ロビン・フッドとフェランテを結びつけた一人である。『僧院』でサンセヴェリーナ公爵夫人は、フェランテの「ロビン・フッド的自由主義」(Ferrante Palla's Robin Hood liberalisme)に心を奪われる: Irving Howe, *op.cit.*, p.45.
- 注60) Walter Scott, *Ivanhoe*, Le Livre de Poche, 2011, p.65
- 注61) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.470
プレイヤッド版の注釈者はこの場面を、ゲーテの『親和力』の描写の影響としているが、全体としてはやはり、スコットの『アイヴァンホー』の方が近いのではないだろうか。

もちろん、そこには、前述したラドクリフ夫人の影響も感じ取れる(注23を参照)。

注62) *Ivanhoé*, *op.cit.*, p.654

注63) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.525

注64) 西川長夫, 西川祐子, 前掲論文, p.40

注65) 同上, p.40

注66) 同上, pp.40-41

注67) このあたりの経緯は、上野美子『ロビン・フッド物語』(前掲書)を参照。

注68) 西川長夫, 西川祐子, 前掲論文, p.40

注69) マンドランの生年月日には、1724年5月3日説もあるようだが、現在では1725年の方が一般的。フラン語版のものも1725年2月11日としている: 千葉治男『義賊マンドラン伝説と近世フランス社会』平凡社, 1987年, p.20; Frantz Funck-Brentano, *Les Brigands*, Hachette et C^{ie}, 1904, p.225

注70) 高木信宏『『ラミエル』における社会諷刺』、『スタンダール小説の創造』慶應義塾大学出版会, 2008年, pp.147-175

注71) 蔵持不三也『英雄の表徴 大盗賊カルトゥーシュと民衆文化』新評論, 2011年

注72) 千葉治男, 前掲書, pp.172-176

注73) Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, in *Voyages en France*, Pléiade, Gallimard, 1992, pp.151

注74) 《追い剥ぎ—詩人—共和主義者—死刑囚》のフェランテ・パラは、1839年11月25日付のプランに、「ラスネールのように」とも形容される『ラミエル』草稿の《コルネイユやモリエールを読む盗賊》ヴァルベールに重なる: Stendhal, *Lamiel*, in *Œuvres romanesques complètes*, t., III, Pléiade, Gallimard, 2014, pp.951-954
また、ラスネールの『回想録』にはその拙い詩が収められている《詩人—人殺し》のラスネールは、フェランテのモデルの一人と言える: Lacenaire, *Mémoires et autres écrits*, Édition établie et revue par Jacques Simonelli (2^e édition), José Corti, 1998. ; ピエール=フランソワ・ラスネール『ラスネール回想録 十九世紀フランス詩人=犯罪者の手記』小倉孝誠・梅沢礼訳, 平凡社, 2014年; René Bourgeois, *Lacenaire, héros stendhalien*, in *Stendhal club*, n° 63, 15 avril 1974, pp.219-229

注75) スタンダールと「法廷新聞」(「ガゼット・デ・トリビュノー」紙)の読書については以下のものを参照: 栗須公正「新聞を読むスタンダール(二) —「ガゼット・デ・トリビュノー」紙の

場合—」、『スタンダール 近代ロマネスクの生成』名古屋大学出版会, 2007年 pp.144-170

注76) Eugène-François Vidocq, *Mémoires*, in *Eugène-François Vidocq Mémoires Les Voleurs*, Édition Robert Laffont, 1998

また、邦語文献は『回想録』の翻訳も含めて以下のものを参照した: フランソワ・ヴィドック『ヴィドック回想録』三宅一郎訳, 作品社, 1988年; ジェイムズ・モートン, 『わが名はヴィドック 犯罪者、警察密偵にして世界初の私立探偵の生涯とフランス革命時代』東洋書林, 2006年; 小倉孝誠『犯罪者の自伝を読む ピエール・リヴィエールから永山則夫まで』平凡社新書, 2010年 (同書はラスネールについても言及されている)

注77) アンドリアースや同時代の作品材源については栗須公正のすぐれた論考がある: 栗須公正「新聞を読むスタンダール」、『スタンダール 近代ロマネスクの生成』, 前掲書, pp.122-306 (同書 第II部第5章から第12章まで)

注78) ベンヴェヌート・チェツリーニ『わが生涯』大空幸子訳, 新評論, 1983年; 『チェツリーニ自伝』古賀弘人訳, 岩波文庫, 上・下, 1993年

注79) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.461

注80) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.239

注81) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, pp.239 et 247

注82) 小倉孝誠『愛の情景 出会いから別れまでを読み解く』中央公論新社, 2011年, pp.39-40

注83) 同上, p.40

さらに、前述した暗黒小説の女流作家ラドクリフ夫人の、恐怖の場면을種明かししてみせる手法や風景の描写力も、ルソーと相まってスタンダールには大いに影響を与えているように思われる: Philippe Berthier, *Stendhal, M^{me} Radcliffe et l'art du paysage*, in *Stendhal Club*, n° 68, 15 juillet 1975, pp.305-337

注84) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, p.471

注85) *La Chartreuse de Parme*, *op.cit.*, 2014, pp.475 et 477

注86) *Ivanhoé*, *op.cit.*, p.108

注87) *Ivanhoé*, *op.cit.*, pp.181-182

注88) 小倉孝誠『歴史と表象』の第3章「ロマン主義時代の歴史小説」での、ヴィニー『サン=マール』の分析を参照: 小倉孝誠『歴史と表象 近代フランスの歴史小説を読む』新曜社, 1997年, pp.79-84

注89) 高木信宏, 前掲書, pp.150